

東大附属の体育祭

東大附属に入学して、最初の体育祭。
6年前のことである。

だらだらと、集合し、何をしているのか分からないプログラム進行。
応援合戦は、ふざけているようにしか見えない。
これが、中高一貫校の体育祭なのか？
ビシっとした体育祭を期待して、朝早くから出向いていた私は、苛立ちを感じ始めていた。
そのとき、100メートル走がスタートした。
100メートルを、直線コースで走れるグラウンドのすごさに驚いていたら、
生徒の真剣な表情が、目の前を風のように通り過ぎた。

2年目、5年前のことである。
生徒会長、体育祭実行委員長はすべて女子、
大きな声で指示をだし、走り回っている女子の姿が目につく。
そして、騎馬戦では、女子の攻撃力や戦略の強さを見せつけられた。
東大附属の男子は何をしているのか？
これまた、1年次とは違う、苛立たしさが私を包んだものである。

しかし、3年目、4年目と過ぎていく中で、私の東大附属体育祭への印象は、少しずつ変わっていくのであった。

そして5年目。指導学年の年を迎えた。
1年次から知っている生徒たちが、開会式前のグラウンドをせわしく動き回っている。
5年前には、ぶかぶかな制服を着て、心細そうな顔をしていた面々が、なんとも頼もしく
体育祭を仕切っているのである。
知ってる生徒だけだけに、その真剣さが伝わってきた。

男子が弱いわけではない。
女子だけが強さを誇っているわけではない。
お互いに協力し、良い関係、居心地のよい関係が作られていることに気がついた。
また、だらだらやっているように見えた動きは、実は、けじめがついている動きであることが見えてきた。

伸びきらないゴムのような、ハンドルのあそび部分のような、
そんな、余裕があるのが東大附属の生徒なのではないか？そんなことを思った。
でもそれは、切れてしまわない安心感はあるけれど、全開で生きていないような、じりじり感もある。
しかしまた、それは単なる親の欲なのかもしれない。

こうして迎えた今年、6年目の体育祭。
前期課程の親御さんからは、「東大附属の体育祭はつまらない」という声も聞こえてきた。

うんうん、わかります。私もそうでした。
何とかならないの？いい加減な、このだらだらした体育祭。
もっとビシっとしたわが子の姿を見たいのに。
朝早くから来た甲斐がないわ。
先生方は生徒に任せてないで、少しは関わったらどうなのかしら？

．．．．．私もそんなことを思っていました。

でも、違うのである。
生徒に任せることが、どんなに大変なのか。
見守ることの辛さを味わうなら、手出し口出ししたほうが楽なことは、
親御さんなら先刻ご承知のはずである。

先生方も同じであると思う。
手出し口出ししたい思いを堪えて、手出し口出しのボーダーラインでご指導をしてくださるのである。
それが、東大附属の先生方のすごさのひとつであり、生きる力の基本を学んでいることでもある。
そして、この6年間での学びは子どもだけではない。
未熟な親の私も、「見守ること」を学ばせていただいたのである。

午前中の焼け付く日差しがおさまった午後。
プログラム最後の色別リレーがスタートした。
1年生、2年生、3年生、4年生、5年生とバトンをつなぎ、歓声と声援の中を6年生がアンカーを走る。
各学年の生徒の走りの中に、東大附属で育てていただいた5年間で蘇った。

その思い出を辿るように、広大な緑のグラウンドに、5月のさわやかな風が吹き抜けた。
この風は東大附属のグラウンドの風、体育祭の風、そして、子どもたちの成長を感じさせる風である。